

千葉に建築を訪ねる

三 成田不動の位置づけ

建築家 三沢 浩

「一番目が「デイズニースランド」で、二番目が「成田不動」となると、現代建築とは離れてしまふように思う読者も多いだろうと思う。前回と同じく、これほど人を集め宗教と信心



とはいえ、大衆的な面できあいの深い建物と場所ということになる。成田国際空港が出来てからは、とにかく便利になったことは確かだが、その分だけ知名度は目減りしているように感じた。反面、今でこそJRも京成も空港に乗り入れてしまったのだが、ここが終点であった頃は、却って空港へ行く時に立ち寄る人も増えていたのではあるまいか。門前町には隆盛と衰退が常に訪れる。ともあれ一九九八年の参詣客は一二〇〇万人、今も増えているという。

それにしても、この終着駅周辺の混雑と集中状態は凄まじいものであった。今でこそ整然としてきた門前町、駅前広場やバス停も一時に較べれば、随分良くなったような気がする。私としては三〇年前の一九六八年に成田山新勝寺が落成して、まだ空港が開かれなかった頃の門前町（写真下）の佇まいが、親しく感じられるのではあるが、猥雑としかいいようのなかった駅前と、木造三階建の旅館が建て詰まり、うなぎ屋が並んで客引きをしているその時の光景は、まだ忘れ難くしている。

「成田山新勝寺」の設計は吉田五十八（1914-1974）である。彼の名は新興数寄屋による和風建築で名高く、大きな著名な建物ではまず

た。「中宮寺」を訪れる人は多いのだが、設計者が「歌舞伎座」と同じだということを知らぬ人の方が多かるうと思う。

「新勝寺」は『新建築』に発表になった。再録した文が言い尽くしているので挙げる。

「江戸以来、新勝寺は参拝客の増加と共に新たな強い本堂を建造してきた。新たに鉄筋コンクリート造による昭和の本堂を加えるに当たって吉田は、寺院を 桝組建築 から脱却させることを試みる。具体的には桝組、二重垂木、暮股、虹梁、長押、釘隠などを一切用いず、向拝の柱をとり、内外陣の間仕切りを撤去した。外壁はユーゴ産の白大理石張り、簾はメラミンの焼付けを施したアルミを採用している。遠目に見たとき寺院であることがすぐわからなければいけないという前提のなかで、吉田なりの 明朗性 へ接近を感じさせる」（『新建築』臨時増刊一九九五年二月「現代建築の軌跡」）

新しがりやではなく、保守的な和風建築に挑戦した一生であった。そもそも学生時代からセセッションである「分離派」に出入りして、卒業設計には表現派まがいの作品をつくる。その後、和風に飽き足らず、かといって近代建築のモダニズムに組するでもなく、和

改造した銀座の「歌舞伎座」がある。上野公園には「日本芸術院会館」あり「五島美術館」「玉堂美術館」、奈良の「大和文華館」などの公共的建築を思い浮かべる人は多いだろう。その一方で芸術家、作家、政治家の住宅を設計し、「古屋信子邸」「山口蓬春邸」「中村勘三郎邸」「吉田茂邸」「岸信介邸」など、挙げるに切りがない。昨今ではとり上げたり、論述されることは少なくなったが、一九九四年一月の「吉田五十八建築展」は芸大資料館と、作品でもある「芸術院会館」を会場に随分と評判であった。

この「新勝寺」が完成した一九六八年には、奇しくも吉村順三基本設計の「新宮殿」が皇居に完成し、巷では初の高層建築「霞が関ビル」が脚光を浴び、学園紛争に明け暮れた年でもあった。吉田五十八には神社の設計はないが、初めての寺院「新勝寺」と同年に斑鳩の里の「中宮寺本堂」を完成し、さらに翌年には東京等々力に「満願寺」をつくった。珍しいことでもあり、急に寺づいたのである。

そして「中宮寺」の他の中に立つ柱に囲まれたお堂の形式は、一九七〇年の「日本万国博松下館」の池と柱と竹藪となり、この二つによって新しいお堂の行き方が評価されもし

風を考え、「新興現代数寄屋」という名を付けて、多くを設計してきたのである。その新たな数寄屋風の意味は誰もが分かったが、彼の言おうとする本質は、当時の「モダニズム」の隆盛の時代には理解しにくかった。日本建築の伝統派である堀口捨巳と、肌が合わなかったのはその点でもあった。吉田は「現代数寄屋」をもって「モダニズム」の表現としていたのである。日本建築が木割の枠から踏み出せない時、約束事を捨て、構造柱と化粧柱を別にして「大壁」を考える。大壁にしてものを隠す。そして必要な柱だけ見せて不要な柱を見せない。だから壁のプランク部分を自由にしたのであった。

しかしこの考え方は、「近代建築」の合理的な構造や、生産性とは合わず、彼の建築は「書き割り建築」「張りぼて建築」ともいわれた。「新勝寺」で見られるように、寺院と見せることを第一として従来の約束事から、つまり寺院建築の様式から踏み出して新しい構造と、新しい鉄筋コンクリートの様式をつくり上げようとした。外側は寺院に似せて、内部の様式を変えた。向拝の柱を取ることなど、考えてみると乱暴ともいえる反抗である。また屋根の柱のおさまりを見ると、なるほど

従来の見慣れた桝組ではなくて、吉田流ともいえる単純な垂木のつき出した装飾がある。これらの工夫が寺院らしく見せているのである。寸法にうるさい人であったし、細部の納まりについては人一倍やかましかったから、納まりは良い。そして遠目にも寺院としての良いプロポーションがある。

このような独自の発明があり、料亭の棚を鉄筋で吊り、舞台を電気仕掛けにするなど、特殊な例もあり、どうしても「近代建築」の信条である所とは反りの合わぬ所があった。芸術院賞には輝いたが学会賞がないのも、こんな所に起因しているかもしれない。しかし一方で、不要な装飾を省き、単純化し、「近代建築」のような所もあった。「近代建築」の退屈さを通り越して、空間の中に趣きをとらえ外部空間で建築をそばだたせ、息づかせるための細かな芸を示すことが得意だった。

他方では江戸風の小粋な所があり、見せ場をわきまえ、私的な空間と公的な空間を分け得た。そこに芸術家や政治家の住宅に通ずる所があったのではないかと思う。「新勝寺」は公的であり大衆的であり、その大衆の心をつかむ宗教心をさらに高め、信心への道をつけているのかもれない。（続）